

HYOGOスポーツ新展開検討委員会 第1回委員会 発言要旨

1 日時 令和5年10月12日(木) 15:00~16:50

2 場所 兵庫県公館 3階 第1会議室

3 議事録

(1) 知事あいさつ

委員の就任をお受けいただき、御礼申し上げます。

阪神タイガースの18年ぶりの優勝を心からお祝い申し上げます。関西ダービーの日本シリーズを期待する。また、ヴィッセル神戸も現在首位を快走している。

体を動かすことは、心身元気になり、スポーツの競技自体が楽しい。コミュニケーションツールにもなり、健康にもいいので、非常に私自身大好きであるスポーツです。また、W杯などがゴールデンで放送される機会が増えてきており、スポーツが国民に力を与えていると感じている。

スポーツの力を地域活性化などに活かすため、今年度、スポーツ部局を教育委員会から知事部局に移管した。そういった中、これからどう戦略的に進めるかを考えることがまず大事で、その戦略のもとに取り組むことが必要。

部活動の地域移行やプロスポーツのあり方、ビジネスとして活性化に繋げる取組、また障害者スポーツをどう根付かせていくか、といった4つのテーマに基づき、それぞれ分科会を設置し議論する。

この会議は、今後の兵庫県のスポーツをどう展開するかという軸を定める大変重要な会議であり、忌憚ない意見をお願いする。

(2) 意見交換

【長ヶ原委員】

まずは、プレイボールとして、栗井副社長から一言ご発言いただきたい。

【栗井委員】

18年間お待たせしたが、ようやくリーグ優勝にたどり着けた。6~7年前からFA、外国人にできるだけ頼らずに生え抜きを育成していこうと取り組み、形になってきたのがこの2~3年。そこに今年から岡田監督を迎えることで、優勝できた。

また、2021年に設立したアマチュアのクラブチームであるタイガースWOMENが、昨日、「全日本女子硬式野球選手権大会」で初優勝した。38年ぶりの日本一を目指す男子にも、ご声援願う。

【長ヶ原委員】

検討テーマの1と2について、この2つは関連性が深いので一緒に検討する。

まず、朝原委員から、特にジュニア世代の育成に関わってこられたが、部活動の地域移行や地域スポーツ振興についてご意見いただきたい。

【朝原委員】

現役時代に、トレーニング先のドイツで地域クラブに興味を持ち、引退後に設立したのが、会社の福利厚生施設を使用した「NOBY T&F CLUB」という陸上クラブチーム。2010年に開始し、小学1年生から87歳の会員がおり、ジュニア世代だけではなく、健康増進やマスターズに参加されている方を指導している。常駐で教えている指導者は、元々トップアスリートであった者も含め9人おり、その中には、クラブ指導以外にも、指導者として活躍している人もいる。トップアスリートのセカンドキャリアのためにクラブを立ち上げたという意味合いも大きい。

クラブ実施には、指導者、財源、場所の3条件が必要。これまではある意味“無償”の指導者であったが、代わって有償ですとなると財源が必要。また、場所も確保も必要。私に関わっている福知山市では、場所を行政が提供して、様々な学校が集まって、民間がクラブとしてやっている。今は部活動とクラブのハイブリッドだが、将来的にはクラブに移行するだろう。

【長ヶ原委員】

クラブチームに会員はどのくらいいるか。

【朝原委員】

約150人から始めて、徐々に増えて約650人になったが、コロナで少し減って、現在約500人で推移している。西宮市の今津に中心の拠点があり、ヤンマースタジアムに週1回、商業施設のもりのみやキューズモールに週に1回出向いて指導している。

【長ヶ原委員】

クラブでの活動は子どもたちへどのような影響を与えていると考えるか。

【朝原委員】

部活動はスポーツに特化した先生もいれば、半分くらいは競技経験のない方が知識を得て指導している事実があり、クラブでは専門的な指導が受けられるので素晴

らしい。ある自治体からはコーチ派遣の依頼があったが、コーチの要員数や会費の問題で断念した。

【長ヶ原委員】

アスリートのセカンドキャリアに、興味を持っているアスリートは多いか。

【朝原委員】

スポンサーされて、プロのような活動をしている方が多い新しい世代が、今後、どう活動していくか注目している。私たちの世代は実業団で支えられた選手がそのまま企業に残るか、教員になる方が多かった。

【長ヶ原委員】

県内では、企業で再就職して、セカンドキャリアを支える取組を促進する動きがある。

【知事】

官民連携でどう進めるかがポイント。朝原委員のお話で場所の提供が気になった。学校は競技施設が充実しているので、どうシェアしていくかがポイント。

【長ヶ原委員】

続いて沢松委員にお尋ねする。ヨーロッパでの生活や、国際的プレイヤーとして、地域スポーツやアスリート育成に関してご意見いただきたい。

【沢松委員】

テニスの部活動では、強豪校は地元のテニスクラブと連携していることが多く、テニスクラブでの練習や学校へのコーチ派遣を行っている。アスリートのセカンドキャリアでは、一般の社会人より引退年齢が非常に若いので、その先の生活に私も不安を感じていた。特にテニス界では、男子の生徒に多い気がする。テニスを続けることへの将来の不安から、高校や大学でテニスを諦めるという子どももいる。

テニス界ではセカンドキャリアとして、IMGアカデミーまで大きなものでなくても、引退後に地元でテニスアカデミーを作り、ジュニア育成を行う人が、世界的にも非常に増えている。錦織圭選手や大坂なおみ選手といったスター選手が出てきたので、テニスをしたい子どもが非常に増え、セカンドキャリアとして何とか成り立っている。セカンドキャリアを安心させることは、人材育成には欠かせない。例

えば、引退後に県内の強豪選手に対して指導や強化合宿を運営するための県の役職を作る方法はあると思う。また、ジュニア選手向けに、引退したアスリートによるトップアスリートになるためのマナー、ドーピングの知識などを教える勉強会もできる。トップ選手になるための人間的な土台作りをセカンドキャリア対策も含めて実施できれば、アスリートにとって、自分の将来に夢を持って、モチベーションが高まると思う。

経験値を上げる意味でも、海外経験、試合経験、強い選手と対戦する経験が非常にアスリート育成においては大切。各スポーツの名門校や名門クラブと海外の強豪スポーツクラブが提携して、アスリートや指導者を送るなど、お互いにとってプラスになる交換留学ができて良い。

女性、主婦目線で言うと、海外、特に欧米と日本のスポーツでは、気軽さが一番の違い。日本でテニスをするには、公営のテニスコースでは基本的に2時間単位、兵庫県は1時間単位での予約、1ヶ月前から抽選など、構えて予約をしなければいけない状況。一方で、ヨーロッパやアメリカでは、各村にテニスコートがあり、空いていればできる状況で、気軽にスポーツをすることを目指すのであれば、施設を気軽に使えるように、スポーツが生活の一部になっていけば非常に嬉しい。学校も含めて公共の場所はたくさんあるので活用できれば良い。

【長ヶ原委員】

I M Gのようなものが日本でもできれば良いと。

【沢松委員】

I M Gアカデミーには私も現地に行った。実際にはテニスだけではなく、ゴルフや野球も盛んで、様々なスポーツのトップアスリートを育成するための施設が整っている。学校や寮、食堂もあって、町の中で生活が完結するような状況になっている。そこまでの施設が日本にあるかという点はまだ厳しい。総合的なスポーツでなくても、何かのスポーツに特化してアカデミーを作っていく形であれば兵庫県はできると思う。

【長ヶ原委員】

特に三木市とかそういう拠点になっていて、そういうところからアカデミーみたいなものが発祥していく可能性もあるかと思う。

【沢松委員】

ビーンズドームがあって、車いすテニスもたくさんの大会が行われている。昔から日本代表選手の約8割が兵庫県出身と言われるくらい兵庫県はテニスが盛ん。

【長ヶ原委員】

他の地域に比べるとアクセスが秀でている。

【沢松委員】

アクセスも秀でているが、何よりも大会を開催できるような多くのコート面数をもつ施設が兵庫県は充実している。

【知事】

ちょっとテニスができるという意味では壁打ちもありだと思うが、そういう場所を増やしていくのもありか。

【沢松委員】

選手の時フルのコートをもっと増やすべきだと思っていたが、一生活者の立場では、コートまでの往復やプレーにかかる時間を考えると、片道5～10分の移動時間でちょっと壁打ちできる所を増やすことはありだと思う。

【長ヶ原委員】

八木委員に伺う。3大会連続でオリンピック出場、そして今は金沢で活動されていて、兵庫のスポーツを外から見て、どう思われるか。現役アスリートの支援や引退後の支援、また勤務する大学とスポーツの関係等も含めてお話をお願いします。

【八木委員】

オリンピックでは特別な経験をしたので、子どもたちにこの経験を伝え、そして出場してほしいという思いから、現在は金沢学院大学で指導をしている。金沢ではスポーツ大使として、ウエイトリフティングに関わらず、スポーツの魅力や楽しさを伝える活動をしている。また、ウエイトリフティングはできる場所が限られており、小さい頃から経験ができないので、大学の練習場を公開して、月に4回ほどジュニア教室を行っている。兵庫県でも一般の子ども達に向けて教室を2回開いた。体験会後に競技を始めってくれる子もいて、トップ選手として活躍する選手の発掘に繋がったが、競技を始めるにあたって、親から送り迎えが難しいという声もあった。

石川県は国体に力を入れており、兵庫県では国体のユニフォームやジャージの購入費は自費で、試合への旅費はスポーツ協会から支援を受けた。

去年まで民間企業に所属し、現役を続けていたが、現役後の就職先がなかなか見つからなかった。民間企業の社員として残る選択肢もあったが、競技に関わりたいという思いから、母校の高校がある金沢に恩返しの意味も込めて、指導者として戻ることにした。兵庫県にもウエイトリフティングに力を入れている大学があれば戻りたい思いもあった。マイナーな競技で競技人口も少ないが、中学から大学まで一貫して続けられるような場所があれば強化に繋がるのではないか。

【長ヶ原委員】

兵庫県はウエイトリフティング部がある高校が 20 校ほどあり、他県は 1～2 校で多いが、大学でできるところが少ない。

【八木委員】

せっかく高校時代にトップになったとしてもそのまま兵庫の大学で競技ができず、他県に散っている状況。

【長ヶ原委員】

ウエイトリフティングが大衆化することを目指していると聞いている。

【八木委員】

今は石川県のスポーツ大使として、ウエイトリフティングの体験会や、競技関係なくスポーツの魅力や楽しさを伝えるというところから、まずは子ども達からたくさんの方に知ってもらおう活動をしている。

【長ヶ原委員】

日本アンチドーピングでアスリート委員も務めておられ、スポーツのインテグリティの部分もジュニアの人に教えるべきだと聞いている。

【八木委員】

私自身も高校生の頃からアンチドーピングの教育を受けており、自分とは関係ないもと感じていたが、自分にも関係あり、何を意識すべきか、興味を持ってもらえるようにアンチドーピングの活動もしている。

【長ヶ原委員】

次に阪神タイガースの栗井副社長にお伺いする。部活動の地域移行について、課題や今後の展開の可能性について、ご意見いただきたい。

【栗井委員】

部活動の地域移行に関しては、危機感を感じている。野球のベースになる小中学生の軟式野球は、10年間で3~4割競技者が減少しており、部活動の地域移行がスムーズにいかなかった場合に立ちゆかなくなるのではと感じている。そのため、NPB12球団でもどのように支援すべきか検討している。全国大会への支援等もその一つと考えている。

地域移行には、朝原委員も発言されたが、指導者、財源、場所の3点セットが必要。参考までに、2018年からタイガースアカデミーを立ち上げ、小学生たちに野球とチアダンスを教えているが、そこでの課題を披露する。アカデミーは、競技者人口を増やすことでファンを増やしたい、選手のセカンドキャリアに貢献したいと立ち上げた。指導者の確保については、タイガースOBだけでなく、タイガースWOMENの選手数名も、専属講師として雇用し確保している。

2021年から、女子のファン獲得に向けて起爆剤になればと、全国女子高校野球選手権大会決勝戦を甲子園で開催しているが、幸いにもタイガースWOMENの活動と相まって、女子の競技者人口が少しずつ増え始めていると聞いている。

財源について、月謝だけでは足りないので、野球振興、ファンを増やすというプロ野球球団としての先行投資の意味で、一定額を負担している。一方で、アマチュアのタイガースWOMENは、多くの企業からスポンサーをもらい、運営費についてはほぼ賄えている状態。部活の地域移行でも、公共だけではなく民間からの支出でのやりかたもあるのではないかと思う。

唯一、アカデミーを広げていくなかで解決できなかったのが場所の問題で、自社所有施設で提供できるところがほぼなく、公共、民間を含めて場所を確保している。学校施設がもう少し柔軟に使えるようなればと思う。

【長ヶ原委員】

競技人口がどんどん減っているのか。

【栗井委員】

硬式野球はそれほど減っておらず、軟式が大きく減っている状態だが、母数としては圧倒的に軟式の方が多い。

【知事】

財源が一番ネックになっていると考えていたが、場所の方が課題ということで、そもそも場所が足りない状況なのか、掘り起こせば出てきそうな感覚か。

【粟井委員】

タイガースアカデミーでは半分くらいはナイターでの実施で、ナイター照明などの諸条件をクリアできる施設を借りられない状況。

【長ヶ原委員】

次は、NTTの樋口さんに伺う。情報通信技術、ビッグデータを活用して、兵庫のスポーツの関係をいかに良くしていくのか。また、NTT西日本はeスポーツの体験施設「eSPARKLe KOBE」があり、eスポーツ振興の可能性についてもお話しいただきたい。

【樋口委員】

NTTではICTを活用して様々な社会課題の解決に取り組んでおり、兵庫のスポーツを盛り上げるために協力できればと考えている。まず、観戦をする立場では、従来のスポーツ中継においては多くのカメラと人手が必要であったが、AIカメラを使うと、無人での撮影と編集、配信が可能でかなり安価で簡単に中継を行うことができる。そうすることで、資金が潤沢じゃないアマチュアスポーツなどでも中継が可能で、スポーツを楽しむ機会を提供し、裾野拡大に繋がると考える。観戦機会を提供する側では、ファンや観戦者のインターネット閲覧履歴やSNS投稿のデータをビッグデータとして分析をすることでファンが求めていることを明確にできる。よりマッチしたコンテンツを提供することにより、アスリートとファンとの関係性強化やスポーツ業界の活性化、ひいては収益化にも繋げていける。指導者確保に課題がある地域には、通信技術を使って遠隔でのレッスンの機会を作ることで、住んでいる地域に拘わらずスポーツができる機会を提供することに繋がる。

eスポーツに関しては、昨年度に県が立ち上げたeスポーツ検討推進委員会にメンバーの一員として参画し、その一環で昨年10月にeスポーツイベントの実証事業を行った。観光客数300人が目標であったが、約600名が集まり、かつその6割が豊岡市以外からの来訪であった。このことから、eスポーツは集客力があり、地域経済の活性化や振興に繋がる可能性は多いにある。加えて、当日にボランティアスタッフとして参加した専門学生からは、将来の仕事をイメージすることができたという声がたくさんあり、キャリア育成という観点でも有意義だと思う。

「eSPARKLe KOBE」では、修学旅行や校外学習、企業の社員レクリエーションに利用いただくケースが増えおり、様々な可能性を秘めていると感じている。

【長ヶ原委員】

知事もeスポーツを体験されたそうで、感想を伺いたい。

【知事】

ストリートファイターズを楽しく体験させてもらった。温泉地でのeスポーツということで、組み合わせ次第で地域活性化に繋がると思う。

【長ヶ原委員】

テーマ1と2を通じて、知事からコメントをお願いしたい。

【知事】

場所、指導者そして財源をどう確保していくのかが共通の課題。ここで兵庫県がどう関わり、取り組めるかが検討のポイント。

場所の問題では、例えばスポーツに関係がないと思われる下水処理場など、公共施設の空いているスペースがあれば、壁打ちに開放、異分野の行政の公共施設との組み合わせは非常に掘り起こし甲斐があるのではと直感的に感じた。

【長ヶ原委員】

スポーツ支援と地域産業が結びついた新たなビジネスを誕生させることを将来のあるべき姿としているが、ビジネスは多岐に渡る。まず、スポーツツーリズムから小野田委員に伺う。旅行会社での勤務経験、現在は大学で観光学を教えておられる立場から、スポーツとツーリズムの関係の可能性についてお話しいただきたい。

【小野田委員】

私は神戸製鋼のラグビー部で活躍した平尾誠二さんの大ファンだったので、神戸の大学に誘われたとき、迷わず神戸の大学に着任した。レガシーを持った兵庫県出身のアスリートはたくさんいます。その人たちをリスペクトしながら、兵庫ならではのスポーツツーリズムを創っていったらと思う。

さて観光業界では世界の国際観光(インバウンド)市場は2050年まで成長するとされている。なぜこのインバウンドが重要かという、日本人の旅行消費額は一人あたり約4万円、これが外国人になると4倍の16万円程度となる。2019年日

本で開催されたラグビーW杯では、一人当たり約 64 万円が日本に消費されており、このようにスポーツイベントの誘致は、外貨獲得に大きな効果がある。

世界の観光市場では、市場規模 72 兆円の「アドベンチャートラベル」というカテゴリーがあります。日本人は少数ですが、熊野古道では多くの富裕層欧米人が連日歩いており、地域経済を潤す。兵庫県でも、淡路島や六甲山などサイクリングの人気拠点を拡大するのもよい。

私は以前関西に住む領事 20 人程度が集まった会議に出席したおり、そのほとんどが神戸在住で、日本の観光コンテンツにおける日本の魅力を伺うと、ほぼ全員が「ゴルフ」と答えていた。兵庫県はゴルフ場が非常に多いので、ゴルフツーリズムも人気がある。

そのほか、スキーについても、六甲の人工スキー場から県北部には八チ高原など多彩なスキー場が都市から近くにあるのも強みである。

このように兵庫県の人と地域の特性を生かしたスポーツツーリズムを展開すると成長するインバウンド市場を獲得できると思う。

【長ヶ原委員】

柳委員から大学でどうスポーツツーリズムを教えておられるか、人材教育も含めてお話しいただきたい。

【柳委員】

あまり時間が無いようなので、小野田委員と重複するスポーツツーリズムについてはなるべく割愛する。県内には豊かな自然資源があり、それらを活用したアウトドアスポーツによるツーリズムを積極的に推し進めていく必要がある。兵庫県はスキー場へアクセスがしやすいが宿泊者が増加しなければ、スポーツツーリズムとしては発展しないので、他のアクティビティも含めて宿泊を伴う仕掛けが重要。文化資産や観光名所巡りを織り交ぜながら、スポーツツーリズムのコンテンツを豊かにする必要がある。

スポーツイベントによるツーリズムも大事で、県内で多く実施されるイベントや遺産をどう有効に活用していくのかが重要。世界パラ陸上競技選手権大会やワールドマスターズゲームズ 2027 関西（以下、WMG）など国際大会が控えており、どうツーリズムに繋げていくかという観点が必要になる。他にも地域の課題解決やニーズに即した新たなスポーツイベントの誘致、若者を中心に人気がある道路やオープンスペースを活かした屋外スポーツやアーバンスポーツ、eスポーツの大会なども、県に適したものを取捨選択しながらスポーツツーリズムとしても活かして行く

ことが大事。また、その招致について、スポーツコミッションの創設が全国的に広がっており、兵庫県でもそのような組織が今後求められると思う。

人材育成輩出については、プロスポーツ団体と協力して、ビジネスコンテストなどを実施している。就業体験等を通じて、地域で学生を育てていくような実体験を伴う経験づくりが必要。特にそのようなイベントを実施するときは、ステークホルダーの教育的な観点が重要で、教育的な観点で学生を育てることを大事にしていく必要がある。学生が伸び伸びとやりたいことをやって、それを若手社員がサポートしていく、どちらにも成長のきっかけになる機会ができることを望む。

スポーツビジネスについて、経済的な効果予測がよくなされるが、経済的な側面だけでなく、社会的な効果もより一層検証していく必要がある。スポーツ観戦により Well-being が高まったという調査もあるが、こういったデータもこれから重要。また、地域のスポーツクラブ（トップスポーツ団体を含む）では経済的な資源が乏しいところもあるので、どういう団体が仲介し、協賛企業を募って、地域の課題解決に貢献していけるのかも課題としてある。地域のスポーツコミッションが貢献できるようになればと考える。

【長ヶ原委員】

スポーツマーケティングから、松田委員に伺う。世界ブランドとして日本のスポーツの影響をどう捉えているのか、地元のスポーツメーカーとして、兵庫に対しスポーツ市場としてどのような魅力を感じているかお話しいただきたい。

【松田委員】

日本のスポーツの現況に関しては、グローバルから見ても少子高齢化が先頭を走って進んでいる。その中でおよそ 75 年前に当社は創業者の鬼塚喜八郎が「健全な身体に健全な精神あれかし」という創業哲学のもと起こした会社。この 10 年、私たちを取り巻く環境は加速度的に変化し、その中で 2030 年までの方向性を示すビジョンを策定した。これまではプロダクト、商品を中心にスポーツの生業をしてきたが、「モノ売りからコト売りへ」ということでサービス事業にも大きく投資をしていこうと現在動いている。その中で 3 つのドメインをしっかりと見つめて、今、活動している。1 つ目は「プロダクト」、これまで通り製品を開発してお客様に届ける。2 つ目は「ファシリティ&コミュニティ」、施設などでお客様同士の繋がりを生み出し、その中でサービスを目指す。3 つ目は「アナリシス&ダイアグノシス」、データを活用して、お客様にどういったサービスや商品がいいのかを見つめて、適正な製品サービスを提供していく、というもの。2 つ目の「ファシリティ&コミュニ

ティ」は、県内にも機能訓練特化型のデイサービス（Tryus/トライアス）を開設し、シニア向けに活動を行っている。また、3つ目の「アナリシス&ダイアグノシス」は、ロンドンの大学とともに運動の効果に関して研究を行っており、その中で1日に15分9秒運動することによって、認知機能や自信、ポジティブさ、短期記憶が向上するという研究結果が出ている。そういった研究結果をもとに、新たなサービスを開発し、今後、兵庫県を発端として、日本のみならずグローバルに向けて様々なサービスを提供していきたい。

【長ヶ原委員】

する、支える、“観る”スポーツとして兵庫としてどう盛り上げていけるか、まずはテレビから井口委員に伺う。在阪キー局として、関西、兵庫のスポーツのコンテンツにどのような可能性を感じているかお話しいただきたい。

【井口委員】

テレビ離れが叫ばれる中、リアルタイムで地上波のテレビを見るのはオリンピックや各スポーツの日本代表の世界大会。スポーツは圧倒的にタイムテーブルにおいて存在力がある。関西において、今年は阪神タイガースが視聴率を取った。阪神タイガースをきっかけに、兵庫のスポーツ、アマチュアスポーツを知ってもらうことも大切。

次に、スポーツジャーナリズム。兵庫県はスポーツの強い高校がたくさんある。番組内で兵庫県の高校スポーツを紹介していると高視聴率を取ることもある。高校生が汗を流し、日々練習に励み、試合に出て涙を流すシーンは視聴者の心を打つのだろう。特に兵庫県においては高校スポーツを放送することが多い。直近では、神戸弘陵高校の女子野球を番組で紹介する予定があり、夏には神戸学院大学附属高校の一人だけの女子野球部員の紹介した時は視聴率も高く、感動を与えた。

【長ヶ原委員】

神戸新聞の豊川委員に伺う。地元紙として地域密着でスポーツに光をあてられてきたが、兵庫の地域スポーツというコンテンツの可能性をご説明いただきたい。

【豊川委員】

神戸新聞は地元紙としてこれまで通り、地域スポーツ発展のために報道で盛り上げていく。全国紙の記者が地方からどんどん撤退しており、相対的ではあるが神戸新聞の取材力が注目されているので、追いかけていきたいと思う。

近年、オリンピック種目に採用されたアーバンスポーツが注目を集めてきているが、まだ中学や高校での部活動がない。報道の立場としては、個人的な関係から地元出身かどうかなどの情報を取ることが難しくなっているため、取りまとめをする協会や団体からもらえるとありがたい。また、中学総体を例にとると、大会を運営してくださる先生方の熱量によって結果報告にばらつきがあり、掲載される情報に差が出てきている。今後それをフォーマット化して、頑張った成果がきっちり報道されることで、地域スポーツがもっと盛り上がっていくと思う。

【長ヶ原委員】

結城委員に伺う。ビジネスを支援していく立場としてどういう支援が必要になってくるか、県民、企業を見回られている立場からご意見いただきたい。

【結城委員】

金融機関から見るとやはりビジネスになりますが、キャッシュも気になる。先ほど財源というお話がありましたが、継続的に行っていくためには、イニシャルコストとランニングコストの2つに分けた場合に、イニシャルコストに関しては補助金や協賛金があるが、やはりランニングコストのところではしっかりキャッシュが回っている仕組みが必要。スポーツは稼いではいけないという問題になるかもしれませんが、やはり継続的にやるためには、一定の利益ないしは収益を上げて、それを次の投資に回していくような、キャッシュフローが回っていく仕組みを作らないと継続できないと考える。そういった意味でも民間企業の力は非常に大きいものだと思うが、寄附だけではなくて、企業にとってどういうメリットがあるか、非常に大事な話である。過去からCSRという言葉がありますが、最近企業の考え方が変わっていて、本業として社会課題をどのように解決していくか、取り組んでいくかに今注目されている。単なる寄附とか協賛ではなくて、それが企業にとって活力になっていくかどうかポイントになる。例えば、人手不足が非常に深刻化しているが、採用という面と退職率をどれだけ抑えるか、企業にどれだけ人が留まってもらえるかが非常に企業の悩みでそれをエンゲージメントという形で、会社に対するロイヤルティとか、地域に対するコミットメント、そういうものが従業員の定着を高めると思います。そういったところに対して、企業スポーツや地域スポーツへの貢献へとどういう形で仕組みとして捉えられるか、きっちりと整理していく必要がある。ちなみに弊行は東京オリンピックにスポンサーさせていただきましたが、社員のエンゲージメントが上がりました。データは取っていないが、実は一番エンゲージメントが上がったのが、パラスポーツ。そういったところで自分がどれだけ貢献でき

ているかが、企業の活力に繋がっていると考える。

【長ヶ原委員】

実証データも含めてお話しいただき、ありがとうございました。

ここまでスポーツビジネス全般のお話でした。ここで齋藤知事からコメントをお願いしたい。

【知事】

それぞれの立場からお話しただいて、ありがとうございます。スポーツをツーリズムに結びつけていくことは兵庫県も非常に大事だと思う。スポーツをする方というのは、環境問題や食べ物でいうと有機農業とかオーガニックとか、いわゆる社会課題への関心も高い層とおそらくシンクロしているところがあると思う。兵庫県は2025年の万博に向けて、ひょうごフィールドパビリオンという県内での社会課題解決型の活動を紹介するという取組をやっているが、もうすぐ200近いプレイヤーの方が参画していただいております、例えば、マラソンや自転車などスポーツイベントに参加した後に、コンテンツを見ていただくとか、スポーツとプラスで社会課題の環境の問題であったり、食の問題であったり、そういうものを合わせて見ることによって付加価値を作っていくというのも1つの考え方としてある。あとはそれを税でやっていくのか、それとも民間のビジネスとしてやっていけるのかというのも一つの大きな論点かと感じている。

【長ヶ原委員】

ありがとうございました。

では、最後のテーマに移りたいと思いますが、ユニバーサルスポーツの振興ということで、第一人者である兵庫県障害者スポーツ協会の増田委員に、今までの経験からパラスポーツに関する兵庫県での可能性について伺います。

【増田委員】

Jリーグが発展したのはトリプルミッションと言われる、勝利とマーケットと普及がうまく絡み合っていると、でもパラスポーツにはそれができないという現実がある。今回の東京パラリンピックにより、メディアがどれだけ取り上げたかという点、オリンピックの商品価値というだけでは比べるものが違う。ユニバーサルという言葉が非常に増えている中で、ユニバーサルスポーツというのは大きな可能性があり、競技性が強くなると重度の障害の方たちの参加にも影響がある。それから、

今、子どもたちにオリパラ教育の中で意識が大きく変わってきている。教育の現場では我々大人たちのインクルーディングな考え方が変わらないと社会がなかなか変わってこないというところに注目されている。情報が少ない中で、どれだけ情報収集と配信が出せるか。障害の方たちの場合、車いすテニスであればニューミックス、視覚障害の方だったら伴走、サッカーであったらキーパーが晴眼者、障害者だけでやる大会や事業ではなくて、一般の方たちとどれだけ一緒にスポーツができるか、そのような仕組みづくりがこれからの展開の方法かと思う。

【長ヶ原委員】

沢松委員に、女性スポーツの環境というのは海外に比べて整っているのかどうか、女性がもっと身近にスポーツできる環境になるにはどうすればよいか、ご意見をお伺いする。

【沢松委員】

一般的な女性のスポーツ環境という意味では、日本は気軽さがないように私は感じている。ヨーロッパやアメリカで生活したときと比べると、女性がスポーツに参加している頻度は、圧倒的に日本は低いと感じている。一方で、アスリートレベルで考えますと、テニスは比較的早い段階から、女子の参加が認められ、皆さんご存知の通り、男女の賞金も同額になるという形で、女性のテニスプレイヤーの立場はかなり認めていただいている方だと思うが、どうしても男子のスポーツのチームは応援するが、女子のスポーツは応援しない、先ほど野球の話があったが、タイガースは見るけど女子野球は見たことないなど、まだまだ多いと思いますので、やる方もそうですが、応援していただく方をいかに増やすかというのが、一番女性スポーツがもっと身近になることが第一歩だと感じている。

【長ヶ原委員】

全体を通じて、アンカーの朝原委員にコメントをお願いしたい。

【朝原委員】

私は兵庫県だけではなく、奈良県など他にもスポーツ審議会のようなものに参加したことがあるが、兵庫県という特徴を出していければと、皆さんのご意見を聞きながら思った。場所の問題もそうですし、既にあるスポーツ団体の特徴とかもそうですが、あるものをまず有効活用して、そこから広げていければ良いと思う。

【長ヶ原委員】

最後に朝原委員に振った理由が、今日はWMGの話が少なかったが、3年前くらいにリレーで優勝している。先日、50代で11秒58の記録を出されて、そのことを私からご紹介したかったのと、今日のお話の中で、やはりするスポーツがないと、なかなか支える、見るあるいは買う、使う、飲むに繋がっていかないと。特に今日は子どもに対してどんなふうにスポーツをしてもらうかという戦略がやはり必要だろうと。これは色々な方法で子どもたちに支援をしなければならないが、その一つとして大人たちがするスポーツの姿を見せることによって、新しい景色を子ども達に見せていくということも必要ではないかと思う。子どもに対して、スポーツの光をどんどん出していくような新しい取組が必要だと改めて個人的に思っている。

WMGの話で最後に、齋藤知事が昨年11月のWMGの宣言で、テニスと陸上100メートルに出場されるとお聞きしました。WMGは過去、開催地の知事が参加されることはなかったので、色々な意味でモデルになって、兵庫県もついて行くと思う。今から新しい改革の中で、齋藤知事が音頭を取って、先頭を走って行ってほしい。

【知事】

増田委員のコメントに少し触れますと、兵庫県ユニバーサルツーリズム条例を制定し、障害をお持ちの方や高齢者が県内各地で旅行しやすいような環境づくりということで全国初めて取り組んでいる。コンシェルジェとか宿の受入を行っていますが、それと同じコンセプトでスポーツも、障害をお持ちの方や高齢者が一般の方と一緒にできるような環境づくりが大事と思っているので、そういった視点をやっていきたいと思う。

スポーツは私も本当に大好きで、スポーツジムは身体をすぐ動かせる場所として良いと思っているし、私も週1回くらい行っているが、プールに行くと高齢の女性がたくさんいて、私が泳いでいると知らない方にクロールの仕方が下手だと指導される。聞くと、毎日のように来ていると。シニアの方々もスポーツを一生懸命されている。兵庫県はゴルフやサッカーなどスポーツ施設が非常に豊かな県であり、その資源をしっかりと活かして、さらに新しい形、県民がもっと気軽に、裾野が広がるような、そしてビジネスになっていくような環境を作っていきたいと思っている。そういう意味でも今日はきっかけとして第一歩になって良かったと思う。こういったスポーツを軸とした、戦略会議は兵庫県ではなかったので、皆さんのこれからの議論にますます期待する。

【長ヶ原委員】

ありがとうございました。本日の意見を事務局でまとめていただき、次の12月の委員会で議論したい。次は、阪神タイガースの岡田監督の胴上げや優勝パレードの後にまた皆様にお会いできればと思う。